

防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第126号(2017. 9. 1)
事務局 川西地区自主防災会

東日本大震災で学んだこと ～ 現場指揮官としての144日間の行動 ～

陸上自衛隊第14旅団副旅団長・善通寺駐屯地司令
(元第22普通科連隊長・多賀城駐屯地司令)

國友 昭



(七ヶ浜町役場前で)

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、その当時、私は宮城県多賀城市において陸上自衛隊の現場指揮官として勤務していました。当地に着任して一年半後の出来事でした。名取市・岩沼市・仙台市以北を含めた宮城県の約8割にあたる地域を担当する実動部隊、第22普通科連隊（「22連隊」）の連隊長であり、隊員約1,500名が勤務する多賀城駐屯地の司令というのが私の仕事でありました。

大震災は未曾有の被害を宮城県にもたらしました。22連隊の隊員も例外ではありません。1名の隊員が津波に呑み込まれて殉職したほか、家族が死亡した者12名、自宅や実家が床上浸水以上になった者84名、また、駐屯地の約1/3が津波により浸水しました。

そのような中、地震発生の日から8月1日までの144日間、22連隊は被災地域において活動し、4775人の人命を救助するとともに450体のご遺体を収容したほか、炊出し、給水、入浴支援といった生活支援を行いました。

これらの活動を通じて、現場の我々は多くのことを学びました。

まずは、『災害は本当に起こる』ということです。

大震災の以前から、非常に高い確率での宮城県沖地震の発生が叫ばれており、色々な形で備えはしていたものの、どこかに「本当に起こるのかな」という油断があったように思います。でも、実際に災害はやってきました。

2点目は、『幅広い関係機関との相互理解と平素からの顔の見える関係の構築』です。

私自身は、デッドラインといわれる72時間は現場に張り付いて人命救助に当たっていましたが、その後は、2ヶ月仙台市、引き続き東松島市で1ヶ月、気仙沼で1ヶ月、市役所災害対策本部横の会議室に私の直接のスタッフ約20名とともに、作戦室を開設、昼間は現場を回り部隊を指導、夕方からの関係者との調整・本部員会議への参加、夜は作戦室で仮眠をとるという活動をしました。この活動を通じて痛感したことは「大きな災害」においては関係機関がそれぞれの利点を助長し、欠点を補いながら、しっかりとスクラムを組んで活動すると、本当に大きな力を発揮する。そのためには、普段から幅広い関係機関が相互理解と顔の見える関係を構築していることが重要であるということ学びました。



(東松島市の災害対策本部員会議)



(気仙沼市長さんと)

3点目は、『計画通りには行かない』ということです。

我々も、普段から色々な形で備えをしていました。予想される被害を見積もり、行動計画を作成し、訓練をしっかりと行う。これは、大変重要なことであり、災害時に役に立つことは間違いありません。でも、被害想定は1つの考えられるケースにしか過ぎません。実際に起こる災害は千差万別であり、通れるはずの道路も通れず、いるはずの隊員もおらず、使えるはずの器材も使えない。それが、突然、目の前に起こります。まさに、「何かあったら、作成した計画は捨て、目の前の状況に、柔軟に対応せよ」ということが求められます。

4点目は、『スピード感＝時間との闘い』です。

大きな災害における自衛隊の最大の使命は、人命救助、命を救うということです。デッドラインといわれる72時間はあっという間に過ぎてしまいます。私は、

地震発生直後に「各中隊は担任する市町村の市役所・町役場に前進、そこで情報をとった後、速やかに人命救助を開始せよ」と命じました。被害の状況などは全くわかりません。でも現場指揮官が判断を迷っていると、その間にも尊い人命が失われていきます。2次被害のリスクもありましたが、隊員達は、地震発生の当日から現場で活動を開始し、実質950名の勢力で、4775人の方を救助しました。



(人命救助活動の様子)



(ご遺体の収容 (左端が筆者))

(ご遺体の収容)

5点目は、『家族の安否確認のための方策』です。

地震発生後速やかに、被災地域に出動を命じました。被災現場に隊員達は出ずっぱり、不眠不休で活動しました。携帯電話もつながりません。私が、「家族の安否がわからない隊員は一度家に帰せ」と命じたのは5日目の夕方でした。その間、家族の安否さえ確認できないまま、その不安を押し殺して、まさに死力を尽くして人命救助に当たりました。家族の安否確認ができなかったのが今でも悔やまれます。

そのほか、多くのことを学ぶことができましたが、「『最後の砦』と言われた我々陸上自衛隊が、強くなければ、この国はこの国民は守れない」ということを

改めて感じ取ることができました。



(救援物資の避難所への配送)



(給 水)



(炊き出し)



(野外風呂)

最後に、よく『自助・共助・公助』という言葉を目にしますが、大きな災害において最も大切なのは『自助』だと思います。気仙沼では過去の津波の経験から十分逃げないで亡くなった方が、塩釜では避難したものの津波の1波目が大したことないという判断で帰る途中で3波目で亡くなった方がおられると聞きました。大きな災害においては、やり過ぎということはないと思います。「自らの命は自らが守ることが大切」、次いで、「自主防災活動などの共助も、また大きな力を発揮する」ということを是非地域の皆様にお伝えしたいと思っています。

災害は本当に起こります。

1、社会福祉制度改革で人心も変わったか？

2011年5月2日から3日間、岩手県陸前高田市の障害者支援施設「ひかみの園」で、避難者へのたきだし活動を荷い、その後今日までさぬきうどんや小豆島ソーメンを、一度に約200食位7年間にわたって贈ってきました。

3日間の滞在中に知的障害者の菅野ミツ子さん（当時70才位）が「料理に使うお味噌を分けて」と言ってきたのが始まりでした、うどんやソーメンを送るたびに、オカズミソやしょうゆのみ等を送っておりました（もろみ味噌）その都度、お礼のハガキや電話があり、菅野ミツ子さんの写真なども送っていただいて身近な存在でした。

ところが、このたび制度改革もあって永年園長を勤めてられていたKさんが退職され、その後は品物を送っても届いたという連絡が無く、電話で確認させてもらうと、届いていたことは判明しましたが、その対応ぶりにガッカリさせられました。

トップが変わると、こんなにも対応が変わるのかと・・・あ然としましたが、どの組織においてもトップの姿勢についてあらためて、その大切さが分かった次第です。



2、親子防災ワークショップ猛暑の中で炊出しを担当

7月29日(土)丸亀市社会福祉協議会主催「親子防災ワークショップ」を開催、約75名の参加、指導はすべて川西自主防災会が担当しました。私（岩崎）も炎天下の中、駐車場にて炊出し食のカレーライスのごはんを担当、昔風の羽釜にマキを

使って5升の米を炊き、こんがりとしたおこげがついたご飯が炊きあがり、子供さんから喜ばれました。火の暑さ、アスファルトの暑さに汗をかきかき水を5分おきに飲みながら作業、頑張りました。



3、かがわ自主ぼう 第2回目の役員会を開催

8月9日（水）13時30分より、国分寺会館において、第2回役員会を開催香川県危機管理課溝渕補佐以下3名のご出席を得て、9月からの主要事業について意見交換を行った。

- 1 9月3日（日）実施の香川県総合防災訓練において、かがわ自主ぼうが担当する訓練内容についての意識合わせを実施
- 2 11月1日（水）午前10時に行われるシェイクアウト訓練後のプラスワン訓練を行う県内の福祉施設の抽出等について意見交換を図った。



編集後記

今月の防災減災の輪は、陸上自衛隊第14旅団副旅団長・善通寺駐屯地司令 國友様の原稿を掲載させていただきました。ありがとうございました。